

Voir と「見る」に於ける知覚動詞の 多義に関与する異質的要因の研究 (第一部)

伊 藤 達 也

0. はじめに

本稿は、いわゆる知覚動詞のうち、視覚を通じての対象の把握に関連づけられやすい日仏語の動詞、「見る」と *voir* の意味の記述を通じ、これらの語彙的まとまり (*unité lexicale*) が言表の中で意味を構築するに際し、どのように異質的要素から影響を受けるかを示すことを目的とする。本稿は二部から成る。第一部では、日本語の本動詞「見る」の二種類の意味を記述し、それらに通底する本質的機能 FS (図式形式) が副詞機能の補助動詞用法「～てみる」でも観察可能であることを示す。また同時に、品詞の変化が FS のパラメタを不活性化しているという仮説も提示する。第二部ではフランス語の中で語彙的に等価と考えられることの多い動詞 *voir* の多様な意味に統一的な説明を与える際にいかなる説明が可能かを考え、日本語の「見る」の観察から得られた成果の一部が *voir* の説明にも応用可能であることを示す。

1.0. 「見る」とその多義性

「スープの味を見る」などの表現¹は日常的に耳にするが、「見る」の辞書的定義²を機械的に適用するならば、この使用は違和感を覚えさせると言

える。なぜなら一般的に「見る」という動詞の使用は、視覚的に把握可能な対象の存在によって成立すると考えられ、「スープの味を見る」の中には、「テレビを見る」、「桜を見る」、「京都を見る」等の場合とは異なり、視覚的に把握可能な対象は存在しないからである。

しかし本稿では、このような「見る」の使用を例外的とは考えず、むしろ、「見る」という動詞の脱意味論化された、抽象的なパラメタの束であるFS (forme schématique : 図式形式) の抽出にとって有意義なデータと見なす。本稿では、FSがco-texte (コテキスト、語脈³)との相互作用を通じ具体的な意味を生産するという仮説に立脚し、「見る」のFSは「～てみる⁴」にも通低するという作業仮説のもと記述を進めることにする。

1.1. 本動詞「見る」の二種類の使用

本動詞の「見る」の使用は次の二種類に分類出来る。

(1) 視覚的に認識可能な存在物を目的 (補) 語⁵とする場合

例：「景色を見る」、「壁の絵を見る」、「時計を見る」、「テレビで天気予報を見て、明日の予定を決める」、「新聞を見る」等。

(2) 視覚的に認識可能ではない語彙を伴う場合

例：「味を見る」「風呂の温度を見る」、「様子を見る」、「ひどい目を見て、こりごりする」、「子供の勉強を見る」、「病人を見る」、「馬鹿を見る」、「計画が実現を見る」⁶等。

一般的には(1)のタイプを、「目で物体を認識する行為」を準拠として第一義とし、(2)のタイプを派生的な用法と見ながちである。しかし言語外的な行為に依拠した「見る」の把握は、この動詞の本質を覆い隠してしまう。何故ならば、以下の記述を通じて示そうとするように、(1)のタ

イプの用例でも「見る」は「目で物体を把握する行為」以上の意味を持っているのである。そのため逆説的ながら、以下(2)のタイプの分析から「見る」の本質に迫り、(1)のタイプの理解を深めることにしたい。

1.1.1. 見えない対象を目的語とする「見る」

以下の例文の分析から始めよう。

(1) 「スープの味を見る」

(2) 「風呂の温度を見る」

例文(1)と(2)で、「見る」は「確認する」、「調べる」などと交換可能であるが、これらの表面的な語義理解の奥に「見る」の担う抽象的機能としてある推移を観察することが出来る。

この推移は適切さに関連する。「スープの味」「風呂の温度」を「見る」とは、不適切な味、温度が、適切な味、温度へと推移することを「見て」しているのである。この適切な味、温度は発話時に実現したものではなく、想像され、期待されたものでしかない。またその実現は人が感覚器官を用いてしか確認出来ない⁷。

この推移が最も明確になるのが、例文(3)のように目的語を二つ持つ場合の「見る」の使用であろう。

(3) 「壁のシミが模様に見える」

(3)では発話主体の認識の中で「壁のシミ」は「模様」に推移する。実際に目に映る(存在する)「壁のシミ」を、発話主体は、想像されたイメージであり、存在物ではない「模様」に関連づけるのである。

同様な例(4)を考えよう。

(4) 「太郎を犯人と見て、捜査を進める」

(4)でも、実際の「太郎」は捜査する主体の中に仮構された「犯人」に関連づけられ、そこに推移する。「壁のシミ」は、「模様」に「見え」始めるとともに「模様」にしか見えなくなるのと同様、「太郎」も、一旦「犯人」に「見え」始めると、善良な「太郎」としては「見え」なくなってしまう⁸。

つまり、世界の断片としての前件（「壁のシミ」「太郎」）は心的イメージ（表象）として後件（「模様」「犯人」）が浮かぶとともに、主体の認識の中で消滅し、後件の方が主体の認識を支配してしまう。つまり主体は実際に存在しているものから離れ、心的イメージに認識を支配されるのである。

要約すると、動詞「見る」は、その目的語ないし、発話時に存在する世界の断片に関連して表象を構築する。その表象は世界に実現するか認識上に実現し主体の認識を圧倒する。「見る」はこの推移をマークしている。

視覚的に把握するという「見る」の語彙的意味はこの「表象の実現化への推移」が「視覚化」を含意するからである。表象は本来心的な存在であり、目に見えないが、実現化（actualisation）（時空間への書き込み）によってのみ、可視化するのである。

ここで観察した「表象の実現化への推移」は、実は例文(5)－(7)のように一見目的語が視覚可能に思われる場合にも観察出来る。

(5) 「私は京都を見た」

(6) 「私は歌舞伎を見た」

(7) 「本を見た」

(5)で「見た」は、「(京都に) 行った」「(京都を) 観光した」「(京都を) 経験した」という意味になる。また、(6)でも「見た」は「(歌舞伎を)

経験した」「(歌舞伎を)鑑賞した」という経験の意味にむしろ関連づけられる。同様に(7)も「視覚的に対象を捉える」だけでなく「(本で)調べた」「(本を)参照した」の解釈が考えられる。つまり「見る」には目的語として現れる語彙に関連して想像されたものから、実現したものへの推移が観察出来るのである。この「経験」の意味もこの「表象の実現化への推移」という本質から派生する⁹。

ところで、以下のような例文はどのように解釈すればいいだろうか？

(8)「30分間余裕を見て、6時半に起きた。」

(8)で「見る」の目的語となる「30分間の余裕」は明らかに視覚的に把握可能な物体ではない。「30分間の余裕」は発話者が、発話時より未来に出現を位置づけているイメージであり、発話時には想像、予測、期待されたものでしかない。したがってこの例では、「30分間の余裕」の実現化を期待するという意味が濃厚である。「30分間」はしたがって、発話時には表象である。その実現は未来にゆだねられたままである。

1.2. 「見る」のFS

以上から、日本語の動詞「見る」のFSは以下に要約出来る。

- 主体 S は（目的語の語彙ないしは発話時に存在する世界の断片に関連して）表象 X を構築する。
- X は、S の介入なく、自立的に、その実現化へと推移する。

このシナリオは脱意味論化されており、具体的な意味が構築されるためには「見る」が出現する環境（目的語として現れる語彙、ないしは発話時

に存在する可視的な世界の断片)からの入力が必要とする。最も簡単に言って、「見る」のシナリオは、「主体が期待／仮想／想像する表象 (représentation) ないしは (image) が実現化へと推移し (passage à l'actualisé)、しかも、その実現化が主体の介入なしに行われる」ことである。具体的な例にそって、このシナリオの展開を見てみよう。

例えば、「海が見える」とは、ある発話主体の視界に突如、海が出現し、結果、主体の認識がその出現に支配、つまり圧倒されることである。同時に海以外の物に対して盲目化が引き起こされ、周囲にある他の物が目に入らなくなる。

「スープの味を見る」というのは、理想的な味付け (期待される表象つまりイメージ)¹⁰に実際の味付けが到達しているか確認することだが、その「味見」行為は理想としてイメージされている味が、実際のスープの中に実現するまで続く。味見とはすなわち、イメージされている味が実際のスープの中に実現することであり、その実現により、味見をする主体は活動を終える。感覚器官が追い求めているのはただひたすら頭の中にある美味の実現するタイミングを認識することなのである。

1.2.1. 「見る」主体の二次性

「見る」の特徴として、主体があくまでも二次的な存在であることが指摘される。主体の二次性は、「見る」のアイデンティティの定義に決定的と思われるが、これには補足説明が必要であろう。なぜならば「見る」は、本質的に主体的な行為であるため、「見る」主体が主導権を握っていると考えられがちだからである。もちろん見る時には、必ず見る主体が存在する。したがって主体性を持たない無生物は「見る」の主語にはならないという制約が存在する。

しかし逆説的に、「見る」という動詞の意味の構築に関する限り、主語に現れる語彙は二次的であり、(動詞の意味論に参加するという意味で)最

も重要なコテキスト（語脈）要素は目的（補）語に現れる語彙なのである。つまり、「何を」見るかが、「誰が」見るかよりも「見る」の意味の内容付与には関与性が高いのである。

「見る」に於いて主体には自立性がないことは、実現化する対象は客観的に存在、変化し、主体はそれを追尾する存在にすぎないことから明確である。この二次性は、(9)－(12)のような対象の動き、状態の吟味、あるいは予想している状態への到達を「観察」する場合の「見る」の使用によっても確認されるであろう。

- (9) 子供の勉強を見てやる
- (10) 医者が患者を見（診）る
- (11) 様子を見る
- (12) 状態を見る

また、「見える」が「来る」の尊敬語として使用される事がある。（例：お客様がお見えです。）この使用も対象が一次的で、主体が二次的という性質に深く関連している。「見る」では相手を上に見、相手に主導権があり、主体はそれを追従するにすぎないのである。

この主体の二次性と関連して、「見る」場合、対象は絶対的に外部に存在し、内部化されないという性質を持つ。これは、同じ知覚動詞「聞く」が、対象の内部化を含むのと対照的である。「聞く」は目的語に、「音楽」、「話」、「意見」などをとるように、内部化を含んでいる。「人の言うことを聞かない」などは、ただ耳にするだけでなく、それを内部化する、つまり「従う」ということを含意するのである。また「聞き酒」なども、ただ、酒を飲むだけでなく、それを内部化し、経験から得られた表象と照らし合わせ、認識、識別することを含むのである。

この主体の二次性は様々な帰結を引き起こす。「見る」ことにまつわる錯誤は、この二次性から帰結する。「見まちがう¹¹」とは主体が実現した表

象に圧倒、支配され、本来のまたは他の価値に対し盲目化することから生じる。

1.2.2. 動詞としての品詞特性

1.2. で記述した「見る」の FS には、品詞属性として動詞の性質が含まれている。動詞の品詞特性としては、語彙が相互作用を行う相手として目的語を指定することである。この特徴は、「～てみる」という副詞化した補助動詞としての使用を考えると明らかになるであろう。後に見るように「～てみる」では、この語彙が相互作用を行うコテキスト（語脈）として、前に接続される動詞を指定するのである。

一般的にあらゆる動詞に共通する性質として、連結辞 (relateur) の機能が挙げられる。連結辞とは二項間の関係を規定する操作子である¹²。動詞は一般的に、主語と（目的）補語という二項間の関係を規定する操作子と考えられる¹³。したがって、図式的には、主語(S)と目的語(X)との間にある関係(R)が成立する SRX という構造で表現出来る。すなわち動詞として機能する語彙のまとまりは、主語と目的（補）語との間にある関係を確立する役割を最も根本的な機能として持つのである。

「見る」の動詞としての品詞特性である連結辞機能は、このように本来は品詞的な規定を伴ってはならないとされる FS に入り込んでいる。動詞としては「見る」は何よりも主体と対象との関係を規定する。「見る」の FS からこの動詞としての性質を分離することはきわめて困難である。しかし、動詞としての連結辞機能を持たない「～てみる」の仕事を見ると、FS のシナリオは、「見る」という動詞の使用とは異なる、より抽象的な形で発現している。

1.3. 「～てみる」における「実現への推移」

副詞機能を持つ「～てみる¹⁴」は、『基礎日本語辞典』では、「他の目的のため、その動作を試みに行う」と定義されている。また森田は「意志性の動作動詞に付いたとき、この意味を生じる。(中略)「咲く、匂う、覚める」など、意志的な動作以外の無意志性の動詞や自然現象を表す動詞には原則として続かない。」とも書く。この指摘は興味深い。

例文に即して考えよう。

(13) 部屋が殺風景なので、壁にポスターを貼ってみた。

(14) 太郎が学校を休んだので、電話をかけてみた。

例文(13)では目的語「ポスター」は「～てみる」の目的語ではなく。「貼る」の目的語である。したがって、「～てみる」は「貼る」にかかる補助動詞であるということが理解される。補助動詞というのは、主に形態的な分類名であり、文法機能上は副詞である。副詞は連用修飾語であり、用言、つまり形容詞や、副詞、動詞、あるいは文全体にかかる性質を持つ。

ここで「見る」は本動詞から補助動詞（機能的には副詞）への品詞変化を経験している。この品詞変化により、動詞としての「見る」のシナリオの一部（連結辞としての性質）が非活性化される。つまり動詞としての使用と異なり、主語と目的語の関係は確立されない。その代わりに、コテキストとして指定される語彙がこの場合、目的語でなく、「～てみる」がかかる先の動詞となるのである。

すなわち「～てみる」では、表象 X が実現へと推移するというシナリオの基本項目は維持されるが¹⁵、X に当たるのは、先行する動詞なのである。ただ恒常的なのは「～てみる」でも主体 S にとって、動詞 X は表象であることである。この表象から実現への推移が「～てみる」の中の「～を試みる」という「試行」の意味につながる。なぜなら「試行」とはイメージを

実際に移すことであるからである。

「ポスターを貼ってみる」「電話をしてみる」は「ポスターを貼る」「電話をする」に比べて、行為化、実現化という意味が加わっている。「～ってみる」の使用に伴い、「ポスターを貼る」こと「電話をする」ことに「実現化への推移」というシナリオが加わっているのである。「試しに～を行う」という言い換えは、非常に弱い意味に解釈されうるが、重要なのは、行為の強弱ではなく、頭の中で思い描いていた（つまり表象にとどまっていた）行為が実現化へ移行したという事なのである¹⁶。

1.4. 「みるみる」

擬態語「みるみる¹⁷」は、動詞「見る」の畳語から構成される。使用される、例文(15)－(17)を見てみよう。

(15) 火がみるみる燃え広がった。

(16) もらって来た鉢植えがみるみる大きくなった。

(17) この洗剤を使うと、汚れがみるみる落ちる。

「みるみる」には、主体が対象の自発的な変化に呆気にとられている様子が表される。これも、「見る」のFSと深い関係がある。「目で見ると」という事よりも、目の前に何らかが「実現化 (actualisation)」し、主体を圧倒している、ということが「見る」の本質だからである。繰り返すがこの時、主体は対象に対して二次的である。つまり主体の介入なしに、対象は実現化を展開している。(15)で火の燃え広がり、主体の介入なしに、進行し、主体はなす術を持たない。(16)の鉢植えの成長も、主体が気づかないうちに、自発的に進行している。(17)の汚れも、主体の意図とは無関係に落ちている。いずれの場合も、「みるみる」は対象の自立的な実現化が中心的な意味として現れてくる。これに畳語という形態統辞上のオペレーションが

加わり、出来事化¹⁸が加えられる。

1.5. 「見る」と「眺める」

最後に「見る」の類義語「眺める」との違いをFSに即して考えよう。「眺める」は、「長目る」に由来するとされ、遠くにある対象を、長時間見る行為と定義されやすい。つまり「眺める」は、「広い範囲に渡って、またしばらくの間、見入る（『基礎日本語辞典』）」ことであり、伝統的に範囲の広さ、時間の長さによって、「見る」と区別される傾向が認められる。

しかし本稿で提案した仮説では、「見る」のFSに特徴的なのは、主体の二次性であった。これに関連して「見る」と違い、「眺める」では主体は対象に対して一次的である事が指摘できる¹⁹。「眺める」のFSを抽出する機会は別に譲るが、「テレビを眺める」、「新聞を眺める」等の場合、「テレビを見る」「新聞を読む」に比べ、主体が集中力を発揮していないと解釈出来る。逆に言えば、「眺める」では、主体は対象に対し主導権を握る主人である。そこから、主体が対象を支配している「俯瞰」的な意味が生じる。「見る」場合のように知覚する主体が対象を追尾するのではなく、「眺める」では、知覚される対象が主体の前に晒されるのである。「眺める」では時間的な長さや空間的な距離も主体が自由に選択できるのである。そこから、「長時間」「広い範囲を」見るという「眺める」の解釈が導かれるのである。「見る」では主体は「見る」時間、範囲の選択権を持たない。

まとめると、「眺める」では、主体が一次的であり、主体の積極的な介入なしに対象は存在しない。「見る」では逆に、対象は主体を支配しうる。「見まちがう」は可能で「*眺めまちがう」は不可能であるように、「見る」は錯覚の可能性を含み、それに対し、「眺める」には錯覚の可能性は生じない。なぜならば、「眺め」られる対象は、主体を支配する事はないからである。「眺め」られる対象は常に二次的である。

1.6. むすび

以上日本語の「見る」という動詞の多様な使用の中の意味的中心を「表象 X の実現化への推移」と見なし、この特徴が「～てみる」の中にも認められることを示した。また、抽象的レベルで捉えると、主体が対象に対し二次的（「見る」）か一次的（「眺める」）かによって、この二つの類義語の区別が可能であることを指摘した。この区別は、フランス語の *voir* と *regarder* にも適用可能であり、互いに影響関係が考えられない二言語の中で、視覚にまつわる動詞が二つずつ存在し、主体と対象の階層関係で使い分けられているのは興味深いと言えよう。

FS は脱意味論化されたパラメタの束にすぎず、したがって品詞的な規定は本来含まれない。しかし統語的要因は FS から生み出される語彙の意味を考える上で無視出来ない。パラメタのある要素が、語彙的まとまりが使用される際に帰属する品詞属性により不活性化（*désactivé*）されることで構築される意味が変わるのである。FS 自体は環境からは不可侵であるが、その実現が環境により影響されるのである。

厄介なことに、本稿で示した通り、FS と相互作用を行う要因はきわめて多様かつ異質的である。それは、周囲に存在する語彙である場合もあり、世界の断片であることもあり、品詞属性である時もある。周囲に存在する語彙と一口で言っても、ある時は名詞ある時は動詞と複雑に変化するのである。

第二部では、フランス語の動詞 *voir* の使用の多様性を記述し、従来の研究ではほとんど触れられていない *il s'est vu refuser l'entrée du club*（彼はクラブへの入会を拒否された）のような受動態に類する *voir* の使用も含んだこの語彙の意味的なアイデンティティを探って行くことを目標としたい。

注

- 1 この用法は例外的あるいは慣用句的なものではない。「エンジンの様子を見る」「風呂の湯加減を見る」など生産的である。
- 2 まず本動詞としての「見る」の意味について一般的な情報を得るために『日本国語大辞典』（小学館）の記述を見てみよう。「みる（見、看、視、観、覧）「目（まめ）」と同語源 1. 目によって物の外見、内容などを知る。またそれをもとにして考えたり、判断したりする。①目にとめる。目で事物の存在を感じとる。②遠くに目をやる。ながめる。また、見物、鑑賞する。③目にとめてこれこれだと思ふ。物事をこうだと判断する。④占う。また予知する。⑤悟り知る。わかる。⑥よく注意して調べる。観察する、また診断したり鑑定したりする。⑦文字に表現されたことを知る。読む。2. 物事を経験したり、物事や人に対して身をもって働きかけたりする。①経験する。ある物事を目に受ける。②人の気持ちや意志、物の質などがどうであるかをためす。③人と顔を合わせる。会う。④（③から転じて）男女の交わりをする。また夫婦として暮らす。⑤世話をする。面倒を見る。⑥ある行為・作用が実現する。
- 3 この術語は語彙意味論では不可欠な概念であるが、co-texte あるいは cotexte とフランス語でも綴りが一定しないことから分かるように、新しい概念であり、訳語も不安定である。元々 contexte（コンテクスト、文脈）という先行概念に由来するが、contexte が文章上の前後関係だけでなく、状況面での前後関係をも含むことから、ある語彙の生起するテキスト上の語彙的な前後環境だけを意味するために co(-)texte という造語が作られた。その内容を踏まえて試みに（コテクスト、語脈）という訳語を与えておく。
- 4 「て」は完了／過去の助動詞「た」（古くは「つ」と同根。歴史的には完了を表したが、文法化し、動詞と動詞を接続する文法的機能だけを残し、アスペクト的価値は消滅したと考えられている。
- 5 フランス語学では、目的補語（complément d'objet）の概念が一般的である。日本語学や英語学では、目的語ないし object の用語が一般的である。いずれの場合も、他動詞の直接目的語を意味する。
- 6 いくつかの例では、目的語を変更出来ず、慣用化が進んでいると考えられる。「*阿呆を見る」。「*楽しい目を見る」。しかし、味、温度、湯加減、具合、調子、人相、手相、人柄、人物、病気、脈、などを「見る」ことは可能

であり、創造性を保っている。

- 7 「風呂の温度を見る」とは風呂の温度が40度であるか42度であるかを温度計で「見る」わけではない。適温であるか否かを触覚で確認するのである。
- 8 類似する表現「太郎を犯人と睨んで、捜査を進める」でも「睨む」という知覚動詞を使用しているが、この場合も視覚的な把握から離れている使用である。
- 9 表象となるのは名詞でなくてもよく、領域を表す場合も同じ原則が当てはまる。例えば「太郎は写真では実際より大きく見える。」では、実際の太郎が（実際より大きい）太郎に結びつけられる。
- 10 表象は目指された (visée) イメージであり、評価に結びつく。評価とはある値を良いものとして選択し、他を悪いものとして排除することである。
- 11 「聞きまちがう」も同様、認知活動に錯誤はつきまとう。
- 12 Cf. Culioli (1990-1999)
- 13 Culioli の創始した TOPE (Théorie d'opération prédicative et énonciative) 「述定と発話操作の理論」では二項関係を repérage の基本関係と見なす。動詞の場合であれば、一見すると一項的な動詞である自動詞の場合も、場所や時の補語、あるいは典型的な述語としての補語が（暗黙に）存在していると考えられる。また間接目的補語がある場合、二項関係が二重に組み合わせられていると考える。
- 14 「考えても見ろ」「思い当たるところを探してはみた」などのように助詞「も」「は」等の挿入を許すこともあることから、「～て」と「見る」との間に語構成上の隙間があることが分かる。なお、古語では「～て」を伴わず、動詞の連用形に直接つく形も存在した。（こころみにおのが心もこころみむいざ都へと来てさそいみよ『和泉式部日記』（『大辞林』））
- 15 辞書の説明にも「実現」というキーワードが頻出する：「ある動作の実現したことを理由として述べる。「お互いの立場がよくわかってみれば、今後は十分上手くやって行けることだろう」、ある動作が実現することを仮定する。「このようなことが相手側に知れてみると、今後の交渉がやりやすくなるよ」『大辞林』】。
- 16 この価値は、命令形に顕著である。（例「やってみろ」「見てみよう」）
- 17 畳語の基底は普通、動詞であれば連用形であるはずだが、この場合、終止／連体形となっている。「*みみ」を避けるための音声的な理由が考えられる。
- 18 Ito (2003) 第二部では、日本語の語構成上の畳語というプロセスに「出来事

化」を中心的仕事として仮定した。

- 19 これは、フランス語の *voir / regarder* にも当てはまる対照性と言えよう。Cf. Franckel (1999 : 407) : "on est maître de ce que l'on regarde, non de ce que l'on voit."
「人は *regarder* (眺める) ものの主人であり、*voir* (見る) ものの主人ではない」

文献

Culioli, A. (1990-1999) *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome 1-3, Ophrys, Paris.

Franckel, J-J. (1989) *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz, Genève, Paris.

Franckel, J-J. & D. Lebaud (1990) *Les figures du sujet, à propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys, Paris.

Ito, T. (2003) *Interactions en jeu dans la variation sémantique des unités lexicales*, thèse, sous la direction de J-J. Franckel, Paris X.

松村明編『大辞林』三省堂

森田良行『基礎日本語辞典』角川書店

『日本国語大辞典』小学館